

Title	Le petit princeの邦訳における誤訳とその周辺：イントロダクション
Sub Title	A study of Le petit prince and its translation problems : introductory remarks
Author	霜崎, 實(Shimozaki, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2007-03
Jtitle	リサーチメモ. 翻訳論プロジェクト2006年度論文集 (A search into language and beyond : challenges in translation studies). ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	共同研究
Genre	Technical Report
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0581-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0581-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 共同研究

### *Le Petit Prince* の邦訳における誤訳とその周辺

#### — イントロダクション —

#### A Study of *Le Petit Prince* and Its Translation Problems: Introductory Remarks

霜崎 實 Minoru Shimozaki

慶應義塾大学環境情報学部教授 Professor, Faculty of Environmental Information,  
Keio University

#### 1. 研究の概要と目的

サン=テグジュペリの *Le Petit Prince* は、内藤濯訳『星の王子さま』によって長い間日本人に親しまれてきたが、2005年に日本における著作権保護期間が切れたことで、多くの新訳が続々と刊行されている。<sup>1</sup>このような現象が没後61年を経て日本において出現するとは、サン=テグジュペリも想像しなかったことだろう。この作品は『聖書』、『資本論』に次ぐ世界のベストセラーと言われており、多くの言語に翻訳されている現状から推察するに、何冊かの新訳の刊行は予想されたものの、ここまでの出版ラッシュになることは出版界においても特筆すべき出来事であろう。

本研究は、こうした特異とも言える事態を前にして、素朴な疑問から出発した。つまり、原典に対してこれだけ多くの翻訳作品を刊行する価値はどこにあるのだろうか、という疑問である。この疑問に対する答えは、まさに翻訳作品の多様性にあるに違いない。翻訳者は、しばしば「黒子」に喩えられることがある。つまり、原典の著者のように、無から有を創り出す役割ではなく、原典の意味を汲み取り、自らのなかに構築した原典の作品世界を別の言語を用いて再構築するのが翻訳者の役割だとされている。しかし、そうは言っても、作品の読み方は読者の数だけあるわけだから、いかに客観性を重んずる翻訳者であっても、完全に「黒子」に徹することなどできようはずがない。翻訳者が意識する、しないに関わらず、作品の読み取りのプロセスにおいて、翻訳者の個性が介在する。また、別の言語を用いて再構築するプロセスにおいても、翻訳者の個性が介在することになる。いわば、原典は翻訳のプロセスを通じて、二重の意味において翻訳者によるフィルターにかけられることになる、と言ってもよい。こうした翻訳のプロセスは、ときに作曲家が書いた楽譜とその演奏との関係に喩えられることがあるが、この喩えはまさに正鵠を射たものと言える。同じ楽譜であっても、演奏家が異なれば別の作品世界が生れるのと同様に、同じ原典を翻訳したものであっても、翻訳者が異なればある意味で別の作品世界が生れることになる。

こうした考えに基づき、研究会では英訳 3 編と邦訳 6 編を取り上げ、作品の間に見られる差異はどこにあるのかを研究してきたわけである。翻訳者は自らの表現のスタイルを持っており、それは翻訳者が原典をどのように読んだのか、理解したのかの反映でもある。そこで、翻訳作品のスタイルを特徴づける言語的要素を特定することによって、翻訳作品のスタイルにおけるバリエーションを明らかにすることを目指して研究を進めてきたが、その際に、どこまで踏み込んだ翻訳>をしているのかが、議論で取り上げられることがたびたびあった。

翻訳は、原典の意味をそこなうことなく別の言語に転換することを目的とするが、原文の意味解釈は固定的なものではない。翻訳者が異なれば、同じ原文が別の言語表現に転換されるのは、例外ではなく、むしろ通常の事態である。翻訳者には原典の制約のなかにあっても、ある程度の表現の自由が許容されているわけで、その自由度のなかで自らの力量を発揮することになるのである。しかしながら、その「自由度」は必ずしも無限に許容されるわけではないところに、翻訳の難しさがある。ある一定の線を越えてしまうと、それは「翻訳等価性」(translation equivalent)の域を踏み越え、「誤訳」の領域に入り込むことになる。しかし、「正訳」と「誤訳」は、連続体をなしているものであり、ときにその判断は微妙である。多和田 (2006: 171) はこの点に関連して次のように言う。

基本的には、あらゆる翻訳は「誤訳」であり、あらゆる読解は「誤読」なのかもしれないと思っています。程度の差はあるでしょうが、それが基本的に程度の差であるということで、<間違っている><正しい>という二極に分けて考えることはできません。

われわれは、そうした微妙な領域のなかに、翻訳という言語転換のプロセスに関する難しさと面白さが存在していると考え、*Le Petit Prince* の邦訳 6 点に見られる誤訳とその周辺について研究することにした。明らかな「誤訳」に限定せずに、「誤訳」とも「正訳」ともいいがたい微妙な表現の世界に踏み込むことによって、翻訳者に許容される自由度と、そこで発揮される翻訳者の創造性について考察してみたい、というのが本研究の目的である。また、このような観点から「誤訳」を取り上げることによって、翻訳分析の新たな方法論への展望が開けることを期待したい。

## 2. 言語資料と研究分担

本研究において使用した言語資料は、以下の通りである。なお、分析の対象とした範囲は原則として、第 1 章から第 10 章までとした。

### 【原典】

Saint-Exupéry, Antoine de. 1946/1999. *Le Petit Prince*. Paris: Gallimard.

### 【英訳】

- ① Trans. by Woods, Katherine. 1945. *The Little Prince*. London: William Heinemann Ltd.<sup>3</sup>
- ② Trans. by Cuffe, T.V.F. 1995. *The Little Prince*. London: Penguin Books Ltd.
- ③ Trans. by Testot-Ferry, Irene. 1995. *The Little Prince*. London: Wordsworth Editions Limited.

なお、論文では上掲の英訳を、それぞれ [W 訳]、[C 訳]、[T 訳] と表記する。

### 【邦訳】(出版順)

- ① 内藤濯(訳) 2000. 『星の王子さま』岩波書店.<sup>2</sup>
- ② 倉橋由美子(訳) 2005. 『新訳 星の王子さま』宝島社.
- ③ 山崎庸一郎(訳) 2005. 『小さな王子さま』みすず書房.
- ④ 池澤夏樹(訳) 2005. 『星の王子さま』集英社.
- ⑤ 藤田尊湖(訳) 2005. 『小さな王子』(新訳『星の王子さま』) 八坂書房.
- ⑥ 河野万里子(訳) 2006. 『星の王子さま』(新潮文庫) 新潮社.

なお、研究担当は以下の通りである。

- |                            |      |
|----------------------------|------|
| ① 内藤濯(訳)『星の王子さま』……………      | 霜崎實  |
| ② 倉橋由美子(訳)『新訳 星の王子さま』…………… | 松本裕介 |
| ③ 山崎庸一郎(訳)『小さな王子さま』……………   | 佐伯祥太 |
| ④ 池澤夏樹(訳)『星の王子さま』……………     | 菅原久佳 |
| ⑤ 藤田尊湖(訳)『小さな王子』……………      | 葦沢大  |
| ⑥ 河野万里子(訳)『星の王子さま』……………    | 鈴木陽子 |

### 【註】

1. 出版順に列挙すると以下の通り。内藤濯(岩波書店)、三野博司(論創社)、小島俊明(中央公論新社)、倉橋由美子(宝島社)、山崎庸一郎(みすず書房)、池澤夏樹(集英社)、川上勉・甘樂美登利(グラフィック社)、藤田尊湖(八坂書房)、辛酸なめ子(コアマガジン)、石井洋二郎(筑摩書房)、稲垣直樹(平凡社)、河野万里子(新潮社)、河原泰則(春秋社)、谷川かおる(ポプラ社)、野崎敏(光文社)、三田誠広(講談社)、石原理通(石原書店)
2. 1953年に「岩波少年文庫」の一冊として刊行されたが、本研究では2000年に刊行された新版を使用した。
3. 本研究では Katherine Woods, trans. 1966. *The Little Prince*. Ed. by Rikutarō Fukuda. Tokyo: Eikōsha を使用した。

### 【参考文献】

- 多和田葉子 2006. 「ある翻訳家への手紙」岩波書店編集部(編)『翻訳家の仕事』岩波書店.